

1-1 近代社会の誕生と民主主義の原理 <基礎編>

現代社会はいつごろどのような考え方の上に成立したのだろうか？

前近代と、 王権神授説

いま私たちが生きている日本の社会は、17～18世紀に欧米で成立した近代市民社会を手本にして作られた社会である。

近代以前【①】のヨーロッパ社会は身分制社会であり、王族・貴族など支配する身分に属する者と、庶民・奴隷など支配される身分に属する者とははっきり分かれていた。身分を越えた結婚は禁じられ、原則として生まれついた身分が変わることもなかった。支配者は被支配者に対して絶対的な権力をふるうことが認められていて、支配者が下した命令や決定に対して、被支配者が反対したり不満を言うことは禁じられ、場合によっては犯罪とされることもあった【①】。

支配者が被支配者に対してもつ絶対的な権力は、「王の権力は神から与えられたものだ」という政治思想(王権神授説)によって正当化されていた。被支配者が支配者に反抗することは神に対する反抗と同じとされたからこそ、被支配者は支配者に反抗できなかったのである。

市民革命と 社会契約説

このような社会に対して、ヨーロッパでは「すべての人間は生まれながらにして自由で平等」【②】と考える政治思想が生まれ、その考え方に合うように政治のしくみを根本的に変えようとする動きが起こった。これが市民革命である。

17～18世紀のイギリスで起きたピューリタン革命(清教徒革命)と名誉革命、アメリカ独立革命、フランス革命は、いずれも「人間は自由で平等である(基本的人権をもっている)」という考えを基本に、民主政治を実現しようとした市民革命だった。そしてこの市民革命によって成立した近代社会を理論的に説明し正当化した政治思想が「社会契約説」である。ホッブズ、ロック、ルソーがその理論家として知られている。

3つのRと 産業革命

市民革命 Revolution で近代市民社会が成立した背景には、14世紀ごろイタリアで起こったルネサンス Renaissance と、16世紀ごろドイツに起こった宗教改革 Reformation がある。これらの変革の成果として前近代社会を批判する精神が生まれ、それが市民革命につながったわけである。そして18世紀にイギリスで起こった産業革命によって資本主義経済が成立し、現代社会の経済的基礎が形成された。

① 人類の歴史は、大ざっぱに古代→中世→近代→現代と区分し、古代と中世を合わせて前近代と呼ぶ。

欧米史では市民革命以後を近代と呼ぶ。日本史では明治維新以後を近代としている。

したがって江戸時代までの日本社会と前近代のヨーロッパ社会とはよく似ていることになる。

コメント [n1]: 2007年度教科書『現代社会』(東書・現社001)
p 110

② 「生まれながらにもっている」とは、「人間として生まれたときに既にもっている」という意味である。

生まれたあとで何らかの手続きに基づいて誰かが与えるのではなく、人間として生まれた瞬間に人間として生まれたというだけの理由で備わっているということである。

コメント [n2]: 2007年度教科書『現代社会』(東書・現社001)
p 110

コメント [n3]: 2007年度教科書『現代社会』(東書・現社001)
p 110